1950年代の民族文化論と「造形」概念
−山下徳治における発生論の形成（6）−

前　田　晶　子*

（2018年10月23日　受理）

Racial Culture and the Concept of “Forming” in the early 1950’s : Genetic Approach in Developmental Ideas of Yamashita Tokuji（6）

MAEDA Akiko

要約

本研究は、戦前期にペスタロッチ研究やプロレタリア教育運動で著名であった山下徳治の戦後における教育論の到達点について、彼の民族文化論を対象に検討したものである。戦時中、山下は子ども研究の蓄積を学校制度改革論として示したが、戦時下の教育言説に添う形で展開されており、当初の発生論的性格は弱められたものとなった。戦後、教育学界から距離を取った山下は、民族文化論の領域で日本人の自己形成―造形論を展開し、さらに中国文学研究者Victor Freneと共に進化心理学協会を立ち上げ、発生論的発達論を文化の形成―造形論として再提起した。本稿ではこの点を考察し、さらに彼の未完の研究となった「日本教育の再発見」について、その概要を示した。

キーワード：山下徳治、民族文化論、形成―造形論、進化心理学、Victor Frene

*　鹿児島大学 法文教育学域 教育学系　教授

１．総力戦体制下の言説

本稿の課題は、1930年代を通じて教育学研究と教育運動の中心に位置付き、宮原誠一や正木正といった戦後の教育学・教育心理学の主たる担い手を育てた山下徳治[1]について、戦中から戦後にかけての論考のテキスト・クリティークを行うことである。山下は、新興教育研究所や教育科学研究会から手を引いた後、1940年代には体制側の教育改革を支える言説を生みだしたが、戦後は一教育評論家として諸種の雑誌に教育論や民族論を展開した。彼は、公的な教育研究機関には身を置かず、また教育運動の主潮流からも遠ざかっており、戦前からの関係が継続したのは成城学園がほとんど唯一であったといってよい。その意味で、彼の展開した戦後のスポーツ教育論[2]や民族文化論は、研究と運動の両面において戦前からの断絶を背負いながら、在野の教育家として独自に活動を組織するなかで生み出されたものであると位置づけられる。本稿で取り上げるのは、後者の民族文化論である。

民族文化論について論じた一連の山下の論考は、一見すると保守的な日本民族の優位性を主張する立場を表明しているようにみえる。それは、戦中に書かれた国家新体制を支える教育・文化運動の推進を訴えた論考と地続きのものである様相を持っている。戦中の論考は、彼がプロレタリア教育運動の中核にいた頃に書いたものと比べると、新しい社会の創造の原動力をどこに求めるのかという点で転回があったといわざるを得ないものである。ここには、教育者の「転向」問題[3]に関わる検討が必要であると考える。そこで、まずは1940年代前半の山下の論考を取り上げたい。

前稿[4]でも触れたように、学制の全面的な改革案を提示した「現代教育制度改革論」（1932年）[5]は、子ども及び人類の発生論的な展開を念頭に置いた組織的な学制の構築を目指したもので、生後２ヶ月から就学前までの託児所を充実させると同時に、後期中等教育において専門教育（職業教育）を据えることによって義務教育年限を17歳まで延長するという計画を提示していた。また､男女共学と高等教育の機会均等を訴えていた点も彼の学制案の特徴であった。ところが、その８年後に書かれた「新教育体制の創意ある計画性について」（1940年）[6]では、発生論的な志向性は弱まり、国家新体制に教育がどのように位置付くかという観点から論述されるようになる。

山下は、為政者のみならず国民のひとりひとりが創意を持って新体制に関わるべきであり、それは「自己の職分の見地から国家への最高義務として考ふべき課題」（p.64）とする。これ

1　山下徳治は1941年に「森」姓となるが、本稿では煩雑さを避けるために「山下」で統一して表記する。
2　武隈晃・前田晶子「「日本スポーツ少年団の哲理・理念」における教育思想の形成過程」（『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』2015年１月）において、山下がスポーツ少年団の立ち上げにおいて果たした役割とスポーツ教育思想の形成について論じた。
3　原芳男・中内敏夫（1962）「教育者の転向―東井義雄」思想の科学研究会編『共同研究　転向』下巻、平凡社。
4　前田晶子「新興教育運動と学制改革論―山下徳治における発生論の形成（5）―」『鹿児島大学教育学部研究紀要』教育科学編、第67巻、pp.101-112、2016年３月。
5　山下徳治「現代教育制度改革論」『中央公論』1932年１月号。
6　山下徳治「新教育体制の創意ある計画性について」『帝国教育』744号、帝国教育会、1940年。

までの学校教育は「有事即応の実力ある人間を創つて来なかつた」（p.66）が、求められるのは「東亞共同体制の樹立、高度国防国家体制の樹立、国内新体制の樹立」を個々の国民が「自己の職分観の見地」から取り組むことであり、「もとより国民にとつて滅私奉公は絶対である」（p.72）とまで述べる。

このテキストの中に、山下のこれまでの教育的思索がどのように溶け込んでいるのか。まず一つ目に、行動と観念の二元論的な把握の否定が挙げられる。彼は、人類の精神とは、現実の行動の中に発見される「生成であり、発展であり、構成的過程である」（p.68）とし、行動もまた精神の過程にあるという一元的把握をしなければ、新体制の建設には至らず「漠然とした滅私奉公」（p.71）に終わってしまうとしている。ここでは、生成・発展の強調のなかで精神の発生論は弱められ、また精神と行動についての現象学的立場が「一元的把握」というとらえ方に変質しながらも、人類史の変化の過程を捉えようとしているところにかろうじて彼の立場が示されていると考えられる。

二つ目は、技術を中核とした教育の組織論である。彼は旧共同体的な社会を想定するのではなく、工業化しつつある日本において「職能制による協同体」（p.65）として国民組織が作り替えられなければならないと論じる。さらに、この新組織が単なる「レショナリズムに陥いる」ことなく、「東亞共同体」として東洋文化の建設を目指すことが重要であり、国民教育の目的もそこにあると強調している。そして、「教育は、発育過程にある人間を対象として明日の社会に役立つ実力在る人間創造を目指した今日の計画樹立を本来の使命としてゐる」（p.68）としており、ここには 1934 年の発育論争で彼が論じた児童学の目指す人間の創造性を思い出させる言説がみてとれるのである。

この論考に見られる人間社会の進化と技術の創造性という主題は、30 年代までの山下の言説と比較するならば、彼の教育学の主要テーマであった子どもの身体性や直観を軸とした教育課程論、児童そのものを「即自」として捉え、人間の高貴性や尊厳性を発見するという児童学の立場は、新国家体制の樹立という視点へと大きくシフトしたといえる。また、技術論においては、国民教育は生産過程を踏まえる必要があるといいながらも、ここでいう「生産過程」はマルクス主義的な意味での労使関係には言及されず、単なる「協同体」という言い方に変わっているのである。したがって、1940 年代前半の山下の立場は、以下の様な言説に代表されるものといっていいだろう。

> 義務期間中の学校教育は一般性と基礎性とがより濃厚であるに過ぎないのであつて、教育方針の核心と教科課程編成の原理や教材選択の標準は飽くまで職業教育中心に考慮されなければ教育の社会化は具体的にはならないし、且つ児童の将来的生活を幸福なものにしないのである。[7]（傍点－引用者）

[7] 山下徳治「秋田への旅日記」『技術と教育』1940 年 2 月号。

２．1950 年代初頭の民族論と形成―造形論

山下は、1939 年頃にはすでに教育科学研究会から距離を取っていたといわれるが、1944 年の教科研メンバーの検挙時においては彼自身も拘留された。戦後、1946 年に彼は郷里の鹿児島に家族と移住し一時期を過ごしている。1949 年には東京に戻り、成城学園を足場としながらスポーツ教育に関わると同時に、一連の日本民族論に関する論考を発表するようになる。1952 年から 1953 年の 1 年間において書かれた論考は以下の通りである（以下はすべて「森」姓の執筆である）。

（1）新しい祖国愛の発見『指導計画』1952 年 6 月号 pp.60-61
（2）日本民族と独自の文化『指導計画』1952 年 10 月号 pp.62-63
（3）日本民族と独自の文化（３）の１『指導計画』1952 年 11 月号 pp.62-63
（4）日本民族と独自の文化（３）の２『指導計画』1952 年 12 月号 pp.62-63
（5）ヒューマニズムと日本民族（１）『波紋』No.26 1952 年 12 月 pp.4-6
（6）ヒューマニズムと日本民族（２）『波紋』No.27 1953 年 3 月 pp.3-5
（7）ヒューマニズムと日本民族（３）『波紋』No.28 1953 年 6 月 pp.5-7

まず、『指導計画』に連載された（1）から（4）の論考は、いずれも、「日本民族の人間形成と文化造形」を主題として、「その精神と手法」が教育を通して培われることを論じたものである。

（1）「新しい祖国愛の発見」はその総論的な位置を占める論考であり、「祖国愛」について、「国民が同じ回想と希望を持つこと」（Anatole France）を引用しながら次のように戦後社会の危機について論じている。

> 終戦前までの日本国民は、万国に比類なき神州として八紘一宇の如き大理想を同じ回想と同じ希望として持ち続けてきた。然しこの神話的回想と希望とは、ひとたびそれが敗戦という厳しい現実に晒されたときわが国民の魂の底から朝霧の如く立ち消えていった。神話は歴史創造の母体ではあっても歴史そのものではなかった。（p.60）

このように述べて、民族文化を通して「祖国愛」を発見し直すことが求められているとする。山下は、日本の民族文化の特徴を次のように論じる。

> 建築や美術に限らず、造園や工芸から生花盆栽に至るまで、実に多種多様な文化材が永い世紀に至る自然進化の過程で創り出されている。…そして重要なことは、かかる自然進化の逞しい創造の道程では、西洋の物質と精神を対立させた二元論的思想ではなく、一切の物質を精神化する一元的思想から文化造形と人間形成とが純一なる調和として生じていることである。…即ち日本文化の造形には、常に心理的建設の裏付があったということである。（p.61）

ここでの彼の日本文化論はやや単純な図式的説明となっているが、注目したいのは「文化造形と人間形成」の調和というくだりである。「形成」と「造形」はともにformationの意であるが、山下においては、人間の内発的な自己表明のかたちと、自然との関わりのなかで人類史として表現されるかたちをそれぞれ「形成」「造形」と言い分けて、そのつなぎをどのように調和させるかが戦後日本の、とくに教育に課せられた課題であるとされたのである。

ところが、明治以降の日本の教育は、自国文化のオリジナリティに根ざすものではなく、従って「自然的自発性」が疎外された状態に陥っていたとする[8]。そのことは、「文化創造にはたらいた精神と手法」[9]に根ざした教育となっておらず、あえていえば教育が個々の子どもの形成論に終始して文化の造形論を欠如させているという主張となっているのである。これは、1951年にすでに書かれた論考からの引用であるが、同時期の山下のスポーツ教育論にも通底する立場である。[10]

続く「日本民族と独自の文化」のシリーズでは、文化造形の「精神と手法」の具体として、まずは「見ること」について論じている。例えば(2)では次のように日本画の技法を問題にする。

> 日本画の画法を見ても、自然の素描は丹念するけれども、いざ作品として描くときには、決して対象を見ながら描いていない。対象から全く離れて描いている。ところが却って、物の生命を捉えた作品が生まれている。(p.63)

俳句や造園も同じであるという。しかし、近代学校教育では、「見ること」を「知ること」の一手段として位置づけてきたために文化の造形につながることがないとするのである。

続いて（3）では、「心と手」を論じて、自然の素材に触れて、手によってその素材の本来の美しさが形作られるとする。ここでいう「素材」は必ずしも実態のあるものだけではなく、言葉の作品（俳句など）も含まれる。つまり、「手」は自然を感得しそこに形を与える人間の活動の全体を象徴するものとして表現されているのである。山下は、日本文化の独自性は、「手」の技法がもっとも自然を単純化した形で表現するという「器用さ」に展開したところにあるとも述べている。そして、（4）では、「器用さ」という「術」が、単なる手先の器用さではなく、自然に開かれた人間の創造的進化という「道」につながるという認識のもとに教育を編成しなければならないと結論づけている。

この「道」の中身について、1951年の論考ではあるが、次のような日本文化の特徴として論じられている。

> 対象に丹念に観いるけれども、いざ描くときには対象を観ないで描いている日本画の手法は、観ることと、描く術と、生命をよりレアルに表現することとが結びつくための最も勝れた

8　森徳治「日本文化のオリジナリティー」『教育美術』1951年、p.5。
9　前掲「日本文化のオリジナリティー」p.4。
10　前掲「「日本スポーツ少年団の哲理・理念」における教育思想の形成過程」。

精神と手法であつた。見ないで描くために、却つて観ることの修練は真実に行われ、それが描く表現形態と手法とに結びついていた。観ることと術との、また知覚と想、との完全な結合が、積まれた経験から未来的構想となつて、よりレアルでよりイデアルな、絵を生み出してきたといえる。

この手法は、美術教育だけでなく、人間教育のすべての仕事のなかで活かされるであろう。[11]

では、次の「ヒューマニズムと日本民族」シリーズではどのようなことが論点とされたのか。(5) から (7) の論考は、鹿児島県揖宿郡頴娃町（編集発行人 国子酔夢）の発行とされる総合文芸雑誌『波紋』という同人誌に書かれたものである。ここでは、人間性の危機が問題とされるのであるが、先の文章群と同様に「自然」との関係で論が展開されていく。(5) では、西洋における人間の自然に対する道徳律による理性化がもたらした虚無主義について述べながら、「創造的進化」を実現するには神秘主義や伝統主義を排して「自然」の模倣とそこからの新しい形の獲得に向かう「開かれた社会」を形成することが肝要であるとする（p.6）。

(6) では、青年のニヒリズムを取り上げて、この問題を社会との関係でみるのではなく、人間と自然との関係において論じなければならないとしている。山下はニーチェ、ベルクソン、そしてとりわけゲーテを参照して、「人間の自然的な形成過程を、人間本来の文化的形成過程と見て、そこに人間の高い教養を発見した」(p.4) と論じている。

(7) は、日本文化を論じた論考と重なりの大きい内容となっており、(2) でも引用された以下の小学１年生の詩が再掲され、日本民族の独自性としての自然へと開かれた文化創造の具体的な教育場面が論じられている。

　　つくし
つくしが出た。
小さいひとつが出た。
あったかいので、
「ぼく出る」といって、
出たのかなあ。　　(p.6)

この詩は、「つくし」という自然物の発生に対する子どもの共鳴が言語表現を生み出したものであるといえる。従って、子どもの表現言語が自然の形成―造形をもって表出したことの例示とされているのである。

このように、山下の民族文化論では、全体として、第二次大戦後の世界史的状況のなかで、日本の民族文化がもつ「自然」を模倣することで文化の創造的造形を成してきたという特徴が、日本の「民族再建」だけでなく、「世界史的課題解決」にもつながっている、という認識が示されたといえよう。

[11] 前掲「日本文化のオリジナリティー」p.9。

３．進化心理学、そして「日本教育の再発見」（未完）の執筆へ

戦後の山下は、在野にあって、成城学園や鹿児島の教員集団、横浜健民少年団や日本体育協会など多様な関係の中で、講演や執筆活動を行った。それらは２でみたような戦後の危機を民族文化の造形問題として捉え、教育をその観点から立ち上げるものとして一貫していたと考えられる[12]。その彼の試みのひとつとして、「進化心理学協会」の立ち上げがあった。この協会については、正式な発足は確認できておらず、現時点では鹿児島大学所蔵山下徳治文書にあるノート類から推測できるに留まっているものである。

以下に、断片的に残されたメモ（原稿冊子類 No.75-77）を編集し、この協会の規約案について資料として掲載する。

進化心理学協会規約

一、総則

第一條　本協会は進化心理学協会 Evolutional Psychology Association　略称 E.P.A と名付ける。~~その核心（推進）機関として進化心理学研究所 Laboratory of the Evolutional Psychology を特設する。~~

第二條　本会の目的、本会は人間存在の最高の機能である純粋にして自由なる精神が、いかなる自然発達の過程において形ずくられるかを究めるために、意識に到る人間本能の進化過程、すなはち、感性の発達に伴う意識の論理的生産過程を、アジア諸民族の自然発達のうちに研究調査し、この自然発達の一元的進化心理学~~をして~~研究の成果を、人類の真実にして永遠なる平和新建設に寄与せんことを目的とする。

第三條　本会の事務所は、　　におく。

二、本会の事業

第四條　本会は、左の事業を行う。

1. 進化心理学の基礎的実験研究所の設置。
2. 進化心理学によるアジア諸民族の特性に関する研究調査室の設置。
3. 機関誌「アジアの心理」の発刊。
3. 実験学校の設置
4. パンフレット、単行本、~~雑誌~~などの刊行および研究会、懇談会、講演会、講習会、演劇会、映画会などの開催による研究の発表および宣傳。
5. 進化心理学図書館の設置。
6. 日本国内および国外における支部会の

［途中不明］

3. 法人会員　本曾の趣旨に賛同し、理事会の推薦したる法人。
4. 終身会員　本曾の趣旨に賛同し、一定額の経済的支援を希望する者で、理事会の推薦したる者
5. 研究所員　本会の進化心理学研究所の研究、調査に直接従事する者。

第六條　本会の会費は左の如し。

1. 一般会員　　年五〇〇円
2. 特別会員　　月一口百円以上
3. 終身会員　　一口一万円以上

第七條　本会には、左の従員をおく。

1. 会長　　一名
2. 常任理事　　三名
3. 理事　　若干名
4. 監事　　一名
5. 研究所員　　若干名

会長は、本協会の事業を統裁す。

常任理事は、本会を代表して、本会の業務を執行する。

[12] 森徳治「民族の運命とその危機」（『人間形成』第 45 号、1964 年）には、戦後 18 年が経ち、経済発展と反比例する形で民族の危機が深まっており、それ故に「民族運動の一翼を担うものとしてわれわれは日本スポーツ少年団の全国組織運動を計画した」（p.24）と記されている。

理事は、理事会において本会の主要業務を決裁する。
監事は、本会の経理および決算を監査し、意見を述べる。
研究所員は、進化心理学研究所の研究に直接従事する。
会長は、理事会において推挙し、常任理事は、理事会において互選し、理事および監事は会長の推薦による。
所長、常任理事、理事、監事の任期は一年とするも、その重任を妨げない。
研究員は、理事会の推薦による。
研究生は、常任理事会の推薦による。
四、会計
第九條　本会の経営は、会費、事業による収益および寄附金その他をもって、これに充つ。
本会の会計年度は、毎年四月一日より三月卅一日迄とし、決算は、監事の承認を経て、所員および会員の総会において報告される。
附則
第一、　本規約は昭和二十六年十月十六日より実施される。
第二、　本規約は、理事会全員と進化心理学研究所全員の承認を経て改正することができる。
第三、　本規約施行の従員は、左の通りである。
会長　ヴィクトリー・フレーン

この規約の第二条に示されているように、本協会が山下の民族文化論を支える研究機関として位置づく性格のものであったことがうかがわれる。彼は、別の断片的ノートにおいて「我々は、アジアについての我々の新しい理解を、唯一の確実な方法を与えるアジアの進化心理学の実証において、世界の他の国につたえアジアと共にコンムニズムから救済することができるであろう」とも述べている。

さて、この進化心理学協会の設立の原動力となったのが、「会長」として名が挙げられているヴィクトール・フレーン（1882生、ベルリン）との交流であったと考えられる。フレーンは、ミュンヘン大学で心理学博士を取得したドイツ人であるが、1913年から1937年まで中国に滞在して「支那民族性」の研究に従事し、1938年以降は日本で過ごしたとされる人物である[13]。彼は、西洋との比較においてアジア（とりわけ支那）の文化の視線主義を論じており、山下の一連の民族文化論もこの人物との関わりによるところが大きいと推察される。管見の限りでは、両者の直接の関係については不明な点が多く、また総力戦体制下の民族政策を担う目的で設立された井上民族政策研究所（井上雅二）によってフレーンの講演が日本で紹介された事実についての経緯についてもよくわかっていない。戦後になって山下が「世界の文化人の日本研究への関心が高まってきている」（ヒューマニズムと日本民族（3）、p.5）と述べていることから、その頃に出会った可能性もある。

山下にとってこの協会の設立が重要であったことは、彼が最後に取り組んだ未完の著「日本教育の再発見」の目次構成の中に進化心理学と日本民族論の確固たる位置づけがなされていることから明らかである。そこで以下に、成城教育研究所蔵山下徳治文書（ノート類No.33）に所蔵されている「目次」の全体を示したい。

日本教育の再発見
目　次
一　日本新教育の再悲劇

[13] これらの情報については、フレーン『支那民族性の研究』（井上民族政策研究所 研究資料第一輯、刀工書院、1941年）に加えて、Victor Frene研究者のErhard Neckermann氏との学術交流によるところが大きい。

１伝統なき近代教育えの出発（福沢諭吉の「学問のすすめ」の冒頭句／一万三千の寺子屋廃業に伴う日本的教育伝統の喪失。／無意識の危険、意識されるとき思想となり、歴史的発展をとげうる。）
２創造なき新教育（創造なき新教育によつて、いかにしてよりいい社会が造れるか。）
３心理学は何を寄与しえたか（望月衛氏の青年心理学（発達心理学的でなく）／指導原理はどこにあるのか。教育に学力、発達と学習、依田新、ジャーシルドと正木）
４新教育理論の弱点（アメリカ教育理論えの反省）
５新教育再建えの道（日本人の自国文化に対する無意識）

二　日本文化の伝統と創造力
１伝統とは何か（アナトール・フランスの「祖国とは何か」への巻は何を主張するか。）
２美術文化に現れた伝統（浮世絵とマネ、ゴッホ、印象派、及びピカソとマチス）
３建築文化に現われた伝統（ブルノー・タウト、ル・コルビジェ／仏教伝来に伴う日本の塔の日本的造形美。／広隆寺、新薬師寺と天平の仏教彫刻 造園 ）
４言語文化に現われた伝統(手ごころ､手ぶり。／ことばのうらとおもて､うつくし､うるわし。／フンボルトの民族研究)
５世界の流れに立つ日本文化（ゲーテの場合、地方文化と人類文化、／文化の世界性。）

三　進化心理学と日本民族の特性
１環境と民族の進化（変化に富んだ日本の風土 - 日本人の豊かな感情。／刺戟と交応、作用と反作用／感情の豊かさと感応性…印象の深さ。）
２人間に根源的生（ニーチェの場合、自明なギリシア的理性の崩壊、自然的なるもの、形なきもの、音楽的なものに求めた理由）
３自然力の増大と発展（中江藤樹 - 羊は跪乳の礼を□□／ジヨルタノ・ブルノーの言葉（アリストテレスに対する。）／衝動性 - 飢えた人間の場合（生活造形の□）／日本民族の自然物の価値化、- 生花、造園等､）
４本能の進化と精神の発展（本能の進化は人間的なものである。／精神の発展は、物の価値化、身体と精神の一体化、一元的進化の道。）
５進化と生活の再構成（進化は、自然性と精神発展の法則である。／進化は自己創造への道である。創造における思考力と行動力とは一元的に連ケイしている。進化は生活においてのみ起るのであるから、生活における自己創造は、思考力と行動によつて生活を再構成する。）

四　科学・芸術・教育
１観察･実験･数学（観察から実験は手の器用に関係がある。／観察の行動性　実験の経験的性格。／数学の抽象能力は、特殊の中に普遍を観る。／数学による量化が発展の契機となる。）
２科学と精神文化（科学はこれまで物質文明といわれてきた。それはその通りであつた。対象だけに注意されたから。／しかし、一世紀前から、その方法は違つてきた。／進化、人間の進化が問題となつた）
３科学と人間性（ポアンカレ -「科学の方法」生物学者が細胞に□□□本能の正しさ。）
４知覚・感性・記憶・想像・創造（自然を見つめる。しかし、描くときには見ないで描く。／この間の心理的□□）
５芸術と人間性（人間自然の自然的形成は、デューイの言える如く本来的な美的なものであり、芸術的な造形である。）

五　歴史・地理・教育
１人間活動の諸関係（アインシュタインの諸論と人間活動の諸関係／時間と空間によつて表示される。／社会科の本来的意義を我々はここにおく。）
２科学の統一としての地理（デューイの School and Society の一節。）
３人間活動の地理的関係（歴史のプロットの舞台としての地理。）
４人間活動の歴史的関係
５地理的把握と歴史的理解

六　生産・経済・教育
１手の進化と自然力の増大（ダーヴィンの進化論。進化という生物進化原理は不動の真理。）
２手の延長と生産(デューイの作業中心の教育。ルネサンスと□□工／ゲーテの手工業にたいする深い思想。／マックス･シェラーの工作人)
３機械の剰余価値（マルクスの使用価値と交換価値からの剰余価値 mehrwert はキカイによる。キカイは手の延長、物の精神化の過程）
４経済の人間的要素
５産業人の人間形成（教育は何れも職業教育に到る／産業社会に産業人を作ることが、職業教育に限らず、今日一般教育といわれるものの共通の課題である。）

七　日本道徳の根柢
１理性と民族（理性という言葉は、個人的な表現でなく、民族的な表現である。シェリングの言葉が正しい。四七頁。）
２行動力と感情（ミュレーの言葉に即する。）
３判断力と英知(中江藤樹「よしあしと思う心をすててみよ。もとの心によしあしぞある。判断の□□□は､行動である。」
４術より道に到る（アジア的でありながら支那と異なるところ／術精しからざれば偉大ならず／ジャーシルドの習慣の自然□的修正の□□）
５日本道徳の高揚（世界史的意義）（人類性）

□□な感受性によって、他人のうちに自己を発見する。他人における自己の同感である。その際、思考と行動が別々でない。他人のうちにおける同感こそ、最も人間的な心情であり、最も高貴なる精神である。
教育においては、子供と大人とが一体になる日が到来している。児童は成人の父なりという言葉が現実となるべきである。
美術の世界において、ピカソマチスが原始人に求めた、原始人と現代人の一体の世界が、そこに開けてきている。

以上、未完となった研究の構想からうかがわれるのは、山下が最晩年に到達しようとしたのは、近代教育の全面的な改造であり、文化造形の人類史から子どもの発生と形成に橋渡す試みであったのではないか、という点である。彼の研究史を大きく捉えるとき、発育論争において子どもの自己形成の「即自」の立場を固持した戦前の地点から、戦時期の学校制度改革論の構想を経て、さらに対極に渡って民族文化の「造形」論の観点から同じ問題―子どものもつ自然性が人間の高貴性につながる教育の道筋、即ち「子供と大人とが一体になる日」―を捉え返そうとしたのではないか、と考えることができるだろう。波多野完治は戦後になって自分は「発達主義」、山下は「環境主義」であり、発育論争では逆の立場を取っていたと語っている[14]のだが、このような山下の転回を予想しての発言だったのかもしれない。

今後の課題として、この晩年の民族教育論と進化心理学が同時代―とりわけ1950年代の日本民族をめぐる論議においてどのような位置と独自性をもつのかという点が明らかにされなければならない。さらに、人間形成における「造形」概念について、山下が取り組んだ技術教育や美術教育との関係で具体的な検討が必要であると考えている。

[14] 『波多野完治全集⑨』月報〈6〉1990年10月、pp.12-13。